ホームページ　http://www.nihonkanpoukyokai.com/
E-mail:　j.kampo@jeans.ocn.ne.jp

日本漢方協会通信

29 年 12 月

第37回　漢方学術大会が開催されました!

～29年11月19日（日）　於 慶応義塾大学・芝共立キャンパス～

特別講演Ⅰ
田中 耕一郎 先生

特別講演Ⅱ
杣　源一郎 先生

分科会発表 1
髙山　留美 様

分科会発表 2
熊井　啓子 様

分科会発表 3
河合　元宏 様

分科会発表 4
安倍 真知子 様

分科会発表 5
千葉　和美 様

分科会発表 6
三上　順子 様

分科会発表 7
吉野　道夫 様

一般発表 1
洪　　涛 様

一般発表 2
細野 美佐子 様

一般発表 3
田中　美穂 様

一般発表 4
大塚　信子 様

一般発表 5
庄司　良文 様

一般発表 6
針ヶ谷 哲也 様

一般発表 7
笠原　良二 様

一般発表 8
上野　睦美 様

一般発表 9
川崎　武志 様

一言治験例発表 1
庄子　昇 様

一言治験例発表 2
石綿　智恵 様

神農祭に参加して

2017年11月23日(祝)、お茶の水にある湯島聖堂において恒例の神農祭が行われました。

「神農」は、中国太古の伝説上の帝王で「炎帝」とも呼ばれ、「易経」の元を作った伏義「黄帝内経」を作った黄帝とともに三皇の一人に数えられます。

「神農」は百草をなめ、自ら毒にあたり薬効を確かめたとされており、医薬の神として、最古の本草書とされる「神農本草経」をはじめ多くの書籍にその名が残っています。

湯島聖堂の神農像は、ほぼ等身大の木彫りで、古木の切り株の上に座しており、身体には薬草の枝葉のような衣服が刻まれ、左手には薬草のようなものを握っています。

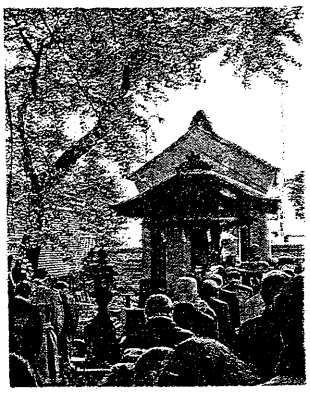
毎年11月23日勤労感謝の日に、神農廟がご開帳され、斯文会と日本漢方協会など協賛11団体（文京区薬剤師会、神田薬剤師会、日本東洋医学会、日本漢方協会、東亜医学協会、方術信和会、温知会、日本医史学会、日本内経学会千葉大学大学院医学研究会和漢診療学、漢方三考塾）によって神農祭を行っています。

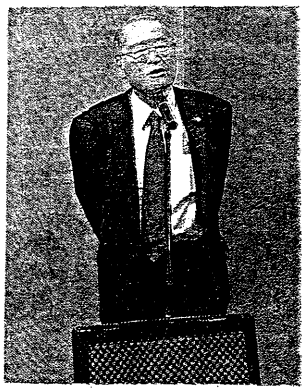
神農廟の門前において、神田神社神職による式典を行った後、講堂で記念講演会がありますが、今年の特別講演は、日本漢方協会講師団長である秋葉哲夫先生による「もう一つの江戸の医学・蘭方ー商館長日記にみるオランダ医学ー」でした。

吉益東洞など漢方医学が全盛であった江戸時代に、オランダとの貿易が行われていた長崎の出島を中心に高度な西洋医学が行われていたという興味深いお話を頂きました。

日本漢方協会からの出席者は、今井会長、三上・小根山各副会長、岡崎・河合飛奈・渡辺各理事と私、また会員の先生方も参加されていました。

（ 文責 ： 中村 ）





【神農祭で記念講演された日本漢方協会講師団長・秋葉哲生先生の講演要旨です】

商館長日記にみる オランダ医学

東亜医学協会理事長　秋葉哲生

江戸時代のわが国には、おおよそ三通りの病気治療が行われていました。
和法、漢方、洋方です。

今日お話しするのは、洋方（当時のヨーロッパ医学）がどのように日本社会に伝わったかということです。

和方

和方の詳細は定評ある典籍もなく、部分的にしか知る事ができません。現在では、民間療法として残存し小規模に行われていると推測されます。

漢方

もっとも古い記録は、日本書紀の允恭朝（いんぎょうちょう）に新羅から金波鎮漢紀武（金武）が来朝したとあります。西暦 421 年です。

洋方（西洋医学）

1549 年、ザビエルが鹿児島に上陸してキリスト教を伝えました。これを機に、宣教師がヨーロッパ医学（南蛮医学）をもたらしたとされています。

しかし、1635 年に海外渡航禁止令、1639 年にポルトガル船来航禁止令、いわゆる鎖国令が出されて、以後はオランダと明国（1644 年からは清国）のみと通商するようになります。オランダから流入したのが、後に蘭方または紅毛医学とよばれた新しいヨーロッパ医学でした。

それは、解剖学に基礎を置いた現代医学につながる新しい医学体系でした。

東インド会社が日本に設置して通商の拠点としたのがオランダ商館です。当初は平戸に、1641 年から出島に置かれました。

「出島は、総面積 3969 坪。商館内には甲必丹（商館長），筆者（書記），荷倉役（倉庫係）や医師，召使など十数人在住したが，館長は原則として毎年交替させられた。館長は貿易その他の館務を統轄し，毎年 1 回また新任ごとに将軍や幕府の重臣にあいさつするため，医師を伴い献上品をもって江戸に参府した。」（『世界大百科事典』平凡社　より）

商館長（カピタン）が記録した業務日誌が「商館長日記」です。その多くがハーグのオランダ国立中央文書館におさめられ、現在に至っています。

1）商館医師が先端の医学知識を有していた話

オランダは、当時もヨーロッパでは大きな国というわけではありませんでした。

ですから、商館の医師もヨーロッパ全土から医師を雇い入れたのです。

時代は下りますが、スエーデン人であるツンベルグや、ドイツの医師であるシーボルトがオランダ東インド会社に雇用されたのはそのような理由です。

共通していたのは、彼らが解剖学に基づく医学を修めた野心的な医師・学者であったことでした。

2) 蘭館医師に助けられた代官の話

商館日記の 1648 年 2 月 22 日には、長崎代官が商館医師によって重傷から救われた記事があります。

『当市（長崎）の代官平蔵殿は、予（商館長）が帰着より十九日前に落馬して脚を折ったが、医師無きため激痛に苦しみ、我が外科医に、来って接ぎ合せんことを懇請した故に、これを許した。若し数日遅れたならば、生命の危険に陥ったであろう。』

岩生成一氏は、『当時外人と最も接触が多く関係が深かった長崎代官末次平蔵が、自ら進んでその治療を受けて居る。これも全くオランダ人医者の優れたことを認めたためであろう。』と述べています。

（岩生成一著、『オランダ史料から見た江戸時代初期西洋医学の発達』日本学士院紀要　第二十六巻　第三号 p157-p173）

3) 薬好きの好奇心旺盛な大目付の話

井上筑後守政重は大目付として、キリシタン宗門のとりしまりにあたり、オランダ人に対する監察の役をつとめていた。

井上は結石の持病があり、たえず発作に苦しんでいたようである。そのためか、オランダの薬に強い関心を示している。

彼の関心は次第に亢じて、1656 年には、ヴェサリウスの解剖書を講義させたり、日本人医師の向井元升（向井去来の父）を長崎に送って、オランダ人医師から医学講義をうけさせ、江戸に報告させたりした。

ついには、1660 年に、彼の面前で、イノシシの解剖をさせ、アンブロワズ・パレの著書により、くわしく解説させた。

*アンブロワズ・パレ＝フランスの高名な外科医

4) さまざまな贈り物の話

井上筑後守政重が 1652 年に商館に注文した贈り物リスト抜粋

○ミイラ

没薬（ミルラ）のことである。俗説では没薬がエジプトのミイラの防腐処理に用いられたためにミルラがミイラに転訛したという。（木下武司『生薬大事典』）

○へいさらはさら（ヘイサラバサラ）

ペゾアール石ともいい、中世アラビア医学で賞用された解毒薬の一種、高価。（宗田一『渡来薬の文化史』）

○人体解剖書

井上筑後守政重の人体解剖に対する関心は高く、再々解剖学書を注文している。ついには、ガレヌスの解剖書の口絵にあるように、ブタの解剖を希望するに至った。

○人体解剖模型

これもできる限りリアルなものを、との注文であった。

5) 背教者ジョアンと偽の一角の話

ジョアンとは、ポルトガル人の元宣教師で、棄教して日本名を沢野忠庵と名乗り、医者として活動していた。

オランダ人は表面的にはキリスト教と無関係に商業活動に携わっていたが、ジョアンを「背教宣教師」とさげすんで記している。

1648 年の７月から９月にかけて、ジョアンは治療法や薬品に関してしばしばオランダ商館を訪れて、商館員に意見を求めていた。

ある日、ジョアンは高貴薬である「一角」を蘭館にもちこんだが、それは、犀角であって一角ではないとの館員の説明を受けて、ひどく落胆したという記述がある。

6）オランダのプリンスの用いる薬の話

江戸に参府した商館長と筑後守政重の問答

問　プリンスは何様な薬を用いるか。

答　健康な時は精神を爽快にするもの、病気の時には必要な薬を用いる。

問　精神を爽快にする薬は何で、その用法は如何。

答　サフランを、布に包んで、ひなどりか小羊の煮汁で煮出して用いる。

問　サフランは当地のものと同じか。

答　否、併し薬品類の中に加えて持参している。

問　オランダ人の寿命は何程か。

答　６０、７０、８０、１００以上。

問　君の国にも疱瘡（天然痘）があるか。

答　ある。

楢林鎮山著『紅毛外科宗伝』1706年

貝原益軒の序

オランダ国、またの名紅夷、その国僻遠極西にあり、しかるに近古以来、彼の国の商舶、毎歳長崎港に来、寄客絡繹（ラクエキ）して絶えず。

その国俗窮理、往々外治に善し、病を治療するに神効あり。その術師法とすべし。

我が邦人これを学ぶ者尠なからず、その法中夏に比並するに、端的捷径要約となして効多し。

本日ご紹介した内容は、おもに西暦１６５０年ごろの江戸時代初期の出来事です。それ以来オランダ経由の西洋医学は、水がしみ渡るように、日本社会に浸透していきました。なかには、紅毛医学を看板に掲げて、医業を行う楢林鎮山のような医師が出現しました。

江戸の医学の主流は漢方医学ですが、１８世紀も半ばを過ぎると、漢方医学の牙城を揺るがすできごとが起こって参ります。

江戸の時代の医学の主流は、言うまでもなく漢方医学でした。

1773 年、漢方医学の偉大なリーダーであった吉益東洞が亡くなります。

その翌年の 1774 年、杉田玄白らが『解体新書』を発刊しました。玄白らが処罰されることも無かったために、以後、蘭方（同時代ヨーロッパ医学）は、日本社会で公然の存在となります。

こののち、西洋医学と、漢方という日本の伝統医学がともに行われるという、今日につづく医学システムの原型が形作られたのです。

まとめ

1　江戸時代初期の、オランダ商館の関わる医事を、「オランダ商館長日記」などから引用して報告しました。

2　徳川氏が江戸に幕府を開いてから三十数年後に、すでに、幕府高官はオランダ医学の長所を知り、病気治療に用いていました。

3　オランダ医学の優れた点は、解剖学にありましたから、外科学はとくに優れた治療効果を上げたはずです。

4　江戸期の漢方医学の考え方には、オランダ医学の反映が看てとれます。

5　現代の日本の医療は、西洋医学と漢方医学が渾然と融合されたユニークなものです。その原型はすでに江戸時代はじめ、滴る水に似た、オランダ医学のほそぼそとした流れに始まっていたのです。